

サモアの交換経済

～作業ノート 2～

橋爪 六三郎

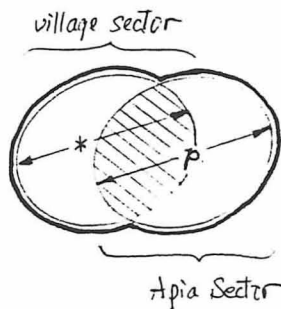
【The Models】

他処でも指摘したように、文化変容を被った社会システムの実態を、とりわけその経済的側面において問題とするならば、これは伝統的な部門 (village sector) と近代的に編み込まれた部門 (Apia sector) との重畳状態として描かれる。他の社会の ethnograph もどうであるのか。むしろ Samoa に関して観察しているデータは、このような複合的なシステム内部の変数である。この複合的なシステムの作動をそのまま記述できるような既存の枠組みは存在しないから、何の準備もなしにこの作動を精確に (すなわち定量的に) おもひえなく記述することはむずかしい。しかし、Samoa 社会は現にどのようなシステムとして数量的な制約関係のなかを動いているのかわり、その作動を適切にうつしとるようなモデルが (原理上) 構成可能ならば好ましい。このような実証的信念から作業をはじめ。

III. 《Acculturated Samoan Model》

：観察されるデータにもっとも即した、十分な群しい複合的なシステムのモデル。その①モデル化、②解法、が不確定。

↑ Prob. B

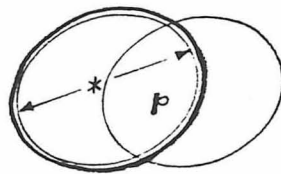


p: 貨幣を媒介とする市場価格が通用している
* : 伝統社会の儀礼的な交換規範が通用している

II. 《Simpler Samoan Model》

：商品市場の作動メカニズムを抽象し、それをたんに外生的なものと考える。

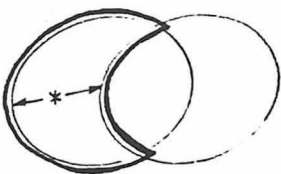
↑ Prob. A



p: 定率の商品引換率として現象する (money as coupon)

I. 《Classical Samoan Model》

：接触以前の、伝統的な交換システムを含む純粋自給経済の、Samoa の固有論理を体現するモデル。



* : 接触以前の、財の象徴的秩序

これらのモデルについて、その Micro Version と Macro Version とを考えるとすることができる。



I ⇒ II ⇒ III へと進むにつれて、モデルの複雑性は増し、それに伴ってシステムの本質を捉え取ることも困難と反っていく。→ Ⅲ, Ⅱ, Ⅰの順に、データは観察しづらくなっていく。何か補助的な仮説をもうけることなしに、より古典的なシステムについて知ることはむずかしい。

システムの複雑化にもともなう論理的な困難としては、Prob. A (= Monetary Problem: 貨幣および商品経済との接触によって、システムがどのように変容するかを特定する問題)、Prob. B (= Double Systems Problem: 自給経済と商品経済とが単一のシステムへと統合されることにより、どのような固有論理から派生したどのような状態が実現しているか、を特定する問題) の二つが大きい。Samoa の交換システムの固有論理を追究するためには、手続上、これらの困難をどうにかして突破する必要がある。

【Theme】

Samoa の伝統的な交換システム — fa'alavelave — は、今日も、象徴財 'ie toga の存在にあてえられている。'ie toga は、交換システム内でのばたらき (= ①交換の量的な仲介物である、②反復的な使用可能性がある、③交換目的以外の具体的実用性に基づいた、たぐいの種類) に着目するならば、primitive money の一種に分類されることかできよう。ただし 'ie toga の場合に注意すべきなのは、それは Samoa 社会の外部から与えられるものではなく、100% 社会システムの内部で産み出されている。これは社会の内生的変数であるということだ。この点も、たとえば New Guinea Highland の Te/Moka システムにおける Pearl Shell と比較してみるとよくわかる。彼らでは、西欧人が大量の Pearl Shell を持ち込んできたために、一種のインフレーションによって伝統的な象徴財の交換比率が大きく変化してしまつた。'ie toga の場合には、このような出来事がある余地はない。これは、入念に調整された、Samoa 特産の加工品 (fine mat) であるから。

'ie toga という象徴財のありかたに、Samoa 社会の戦略がのりたくあらわれている。まず、'ie toga は婚姻の際に必須の財 (女財) であり、男財 (オタを中心とする実利的な物品のたまご) と交換される。Samoa 社会のすべての交換は、基本的に言って、この婚姻交換の反復であり、各 'aiga (= local な血縁的・共同生活単位) は相互に無数の交換の網目によって繋がっている。'ie toga は、オタを中心とする戦略物資の (再)分配を、女性の交換と圧着させ、空間の全域を平準化する、基本的な操作子であるのだ。たとえばどの 'aiga も、'ie toga を生産することはできる。とここで、'ie toga を含む交換は、各交換当事者の意思を介在させるもののように、思われたい。しかし、たとえある 'aiga が、いかに 'ie toga を生産し交換システム中に投入することもできるにせよ、それは同時に既存の、あるいは他の 'aiga の生産による、'ie toga をまた同等の貴重財 (valuables) であることと、自ら承認することにはならない。個々の 'ie toga は

依然として、個々の交換当事者に外在する拘束力を知るべきではない。とくに、'ie toga は、ひとつの操作子、任務された稀少性なのである。

'ie toga 抜きに Samoa の交換システムを考へることができないのは明らかだ。とくに 'ie toga は、どのように人々の交換を調節しているのか？ とはいくつか定量的な現象を考へたことは、ほぼ疑いなくのもの。実際 'ie toga がどのように fa'alavelave を制約しているのかを明示的に考へる議論はまだ成立しなない。むしろ 'ie toga が Samoa の古典的なシステムを、とくに Samoa の貨幣の浸透（反複合的なシステムを、とくとしてあらわしている基本的なシステムを解明することを目指す）。M.D. Sahlins は 1965 年の論文^{*}において、交換比率がいかに定まるかについて一般的な考察を試みている。交換が持続的なものとなり、とから敵対関係が生じないためには、"与えすぎ" くらいで丁度よいのであるが、これもよく似た感覚が可能であるためには、"ちょうど同じ" という感覚がなければならぬのである。このような共通感覚の背後には、それを裏付ける何かある状態がとらえられているのではない—— Sahlins はこのように考へた。とくに彼はとくに、労働価値 (labour value) を想定するのである。これを、Sahlins の仮説 とよんでおく。

* Sahlins, M.D. 1965 'Exchange Value and the Diplomacy of Primitive Trade', in Helm, J. (ed.) *Economic Anthropology: Proceedings of the 1965 Spring Meeting of the American Ethnological Society*: 95-129. Univ. of Washington Press.

Samoa の fa'alavelave にしても、この "釣り合い" の感覚は実に活き活きと人々のなかには脈が通っている。とくに Sahlins の仮説が妥当するものとしては、'ie toga が交換の場面でいうとる象徴財としての評価は、その生産に要する低下労働量によって決定されていることになっている。—— 'ie toga 以外の各財の価値を同様に計算して、規範的な交換比率が低下労働量の比に等しいのとすれば、Sahlins の仮説は Samoa において有力な支持を見出したことになる。'ie toga は、多少緩慢ではあるが着実に浸透してゆくものであり、その一方で人々の生産にも補充されている。Sahlins の仮説が妥当する場合は、この規範的な生産活動が一種のスイッチング機構によって支配されており、'ie toga が不足気味で（数量的な前提にも）その価値を上回る交換価値をもって評価される時、すぐさま生産が開始され、とどなくなるまで生産が中断される、という場合があり、とくに限らぬ。このプロセスを、'ie toga 価値説 という。

計算の結果 Sahlins の仮説が妥当しないのなら、すなわち 'ie toga がその価値を下回って、または上回って、交換されているとすれば、その交換比率はどのように決定されていると解釈すべきであろうか？ 穏当な理解はやはり、数量的にもとつて理解である。'ie toga がその価値を下回っているのだとするならば、各 'ai'iga は ie toga を生産するヤミクモな動機をもって

けいひがたにない。昨今みかたつたてにたてようであるが、かゝる alii'i がたてもあつて 'ie toga を生産させたそのストックが、今も 'ie toga の下り傾向を蓋して置けるのかもしない。たゞ 'ie toga が交換場面での価値を上回っているのだとすると、'ie toga の物神性、ないしは一途な浸透傾向を考へてみるべきである。—— いずれにしても、このようにして 'ie toga の交換比率が定まるという想定を、'ie toga 数量説 とよんでおく。他に可能な想定としては、'ie toga 規範説 というものもありうる。これは fa'alavelave の交換比率が伝統的に、実物数量の比率として定まるとして、'ie toga の数量も価値もその比率には関係しない、というのである。この規範説によれば、fa'alavelave は数量的な拘束力をもたないことになっているので、交換される品目の数量構成が変化する場合には、容易に破綻してしまふのである。

'ie toga が fa'alavelave という交換過程に関与する仕方は、論理的に言へば、上記の3つのタイプのいずれか、さらにはそれ以外の 'ie toga の現象が、価値論的に生じているのか、とくに数量説的あるいは規範説的に生じているものかを、Classical Model から Acculturated Model に至る各モデルで、検討してみることが、まず試みるべき作業であろうと思ふ。象徴財 — 稀少財が、社会システムの中で、各交換単位 ('ai'iga) において "生産" されるから、交換過程を外部に統制してしまう際のメカニズムを、実証すること。

【 'ie toga 数量モデル】

'ie toga は、貨幣類似物であるけれども、商品市場における貨幣 (money) とはちがひがある。というのは、'ie toga は任意の状況下で任意の財と交換できる性能（つまり、一般的な購買力）をもっていないから。そのかわりに 'ie toga は、一群の交換財のまとまりとひとくちには、譲りわたされる。fa'alavelave は、両交換当事者のあいだの main exchange (第1段階) を中心に、とくに先づ piling up (第2段階)、とくにひきつぐ redistribution (第3段階) の過程からなるが、規範的な交換比率がもっとも明瞭に現象するのは、この main exchange にはかたがた。双方は相対的に提供される財質を上回る購取をなすことにより、面目をほごにしようとす、こうした角逐を通じてある均衡が実現されていく。

'ie toga 数量モデルは、次のように構成される：

① 'ie toga の標準的な1単位を何らかの基準にもとづいて設定する。

'ie toga は、ごく普通にはその枚数を数えらるが、極上のものから粗雑なものまで品質に相当の差異がある。また同一のものにして、経年的な消耗にわれ、その '評価' は減少してゆくというところがある。こうした差異を定量的に算定できなければならぬ。とくに (i) も Samoa の

人々のあいだに、利用可能な資源の基準が異なる。これをうまくとりこむことを考える。しかし、利用可能な基準はたぶんうまくとりこまれないから、これに替る客観的な手続を構成する。ひとつの提案は、つぎの仕方 (H方式) である。

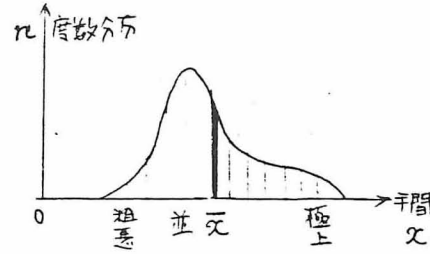
(H方式) (i) 労働投入量を反映できるように、量化を試みる。'ie toga の生産工程を (もし調査できるなら) 参考にしながら、年間 (= 'ie toga 1枚を構成する繊維の総本数、すなわち目の詰まり具合) を計測の対象とする。 ('ie toga の面積の大小も、この仕方によれば正確に計量できる。) 大きすぎて計量できないものは、単位面積 (たとえば 100cm x 100cm) を定め count し、面積倍する。

(ii) 代表性のある程十ヶ所の 'ie toga について、

(i) の count した、2.25m x 1.1m 年間 (x) ごとにその度数 (n) を取る。その算術平均

$$\bar{x} = \frac{\sum n x}{\sum n}$$

に相当する 'ie toga を、標準 'ie toga 1枚とみなすことにする。(図の例では極上のもは、標準 'ie toga に換算して 2枚、並は 0.8枚、粗悪品は 0.5枚となる。) このようにすると、品質差が全くわからず単に移動した 'ie toga の枚数を H が知られている場合にも、その枚数が上の数値と (調査に用いたデータに十分な代表性がある等、いくつかの条件を満足するならば) 結果的に一致する、という利点がある。このように各 'ie toga の検査が実行できれば、その数値が Samoa の人々の価値観と一致しているか否か、逆試してみること必要である (native check)。



② 'ie toga 以外に E、'ie toga にほぼ相当する代替物が存在するならば (例として fala lili'i?), ①で採用した類同の手続によつて標準 'ie toga へと換算する。

③ $MV = PQ$ ('ie toga 数量方程式) の成立を想定する。

貨幣の数量方程式は、通常 $MV = PQ$ の形で表示される。その左辺、右辺はそれぞれ一定期間における貨幣、財の flow 量である。各財は、数量に貨幣との交換比率——価格——を有している。貨幣を単位単位とある二つの等式が可能であるため。これに代り、'ie toga は、すべにのちたように、交換システム内のほかの財を "価格づけ" することができるとはならない。これはたゞ、都度々々 fa'alavelave の存在を認めるからである。そこで、上式を構成する各変数は、次のようなものとする。

M: 'ie toga の総財存量 (標準 'ie toga に換算した枚数)

V: 'ie toga の平均回転速度 (単位期間一年あたり、何回の fa'alavelave に巻きこまれて、'ie toga がその持ち主をかえるか)

P: 1回の fa'alavelave で授受される 'ie toga の、平均数量 (標準 'ie toga ~枚)

Q: 単位期間一年間に於ける fa'alavelave の総回数

各変数のいみおよび数量方程式 ③ の成立については、多くを語るまでもない。③が成立するならば、その4変数の内3つから、他のひとつ (たとえば: 直接に観測不能である M) を算出することができる。各変数の観測可能性については、若干の註記が必要である:

M —— 'ie toga のうち、純粋に隠蔽されている部分 —— たとえば: 教会に保管されているものなど —— を M' とする。当該社会にほんとうに存在している 'ie toga の枚数は $M + M'$ ということになる。 $M + M'$ は、特定の、ある1つに代表的な 'aiga の資産勘定 (さらには、教会その他 'ie toga を所蔵している主体の資産勘定) を根拠に、これを 'aiga の総枚数とする等して、推算できる。'aiga の場合、'ie toga の保有動機は、準備動機、(婚出する女性の需に供するための) 貯蓄動機、に大別されるはずであり、純然たる隠蔽は考えにくいので、簡略化の場合には M' を無視してもよいかもしれない。

V —— 'ie toga は人々のあいだで、fa'alavelave のあるたびごとに、移動していく。この頻度は、おそろしく一定でない。殊に極上の部類に属する 'ie toga —— (これは、特別の名前かつ呼ばれていたとしても、根の結婚のときまで出し惜しみしない) —— は、回転スピードが他の 'ie toga よりも緩慢であるにちがいない。これに代り、要質は良質を駆逐するのと同じ通り、粗悪な部類の 'ie toga はより回転の周回が早いのである。V は、これの平均である。最もよい仕入れ、十分な数の 'ie toga について、その行き先を實際追尾し、その量がくくり取れる fa'alavelave の回数をカウントし、平均をとる仕方である。これが無理である場合には、標準的な 'ie toga (枚数) に対し、その移動を同じく追尾するという仕方。これは、ある 'aiga の、一定期間中の 'ie toga の出入り枚数、fa'alavelave の参考の度数から、間接的に推算するという仕方もある。

P —— fa'alavelave は、婚礼のほか、初子誕生、新婦就任、葬礼、葬式、これに E が入る。これに代り、fa'alavelave の規模 (どの程度の参加者があつて、どの程度の財が移動する) は一定でない。たゞ、大きな fa'alavelave では、枚数を 'ie toga の量が多い。と仮定する。P を推算するには (i) 特定 'aiga

に注目し、その際与えられた fa'alavelave の平均規模 E' ie toga 枚数に Q もとめみる、(ii) 特定区域に注目し、そこである期間に生じた Q の fa'alavelave に同じ規模の平均をとるため、などの仕方がある。以上が無理であれば、総数の informant が、1回の fa'alavelave の平均(家数で)何枚の 'ie toga がかりと1枚のものを数えだしてみるしかない。

Q — Samoa 全域における fa'alavelave の総数/年は、その代表的な 1 区画からの推算によって求めるのがよい。その場合、地域差(教会新築の有無、伝統聖守の度合、...) を巧みに補正する必要がある。(Apia 在住の Samia (たまたま、単純に、村落部から取りよせておいたのでは?) 時系列をさかのぼるデータにおいては、(i) 現在のデータから、人口数、'aiga 数などの変動を織り込んで逆算する。(ii) 特定区域において、10年前、20年前... の状況を各 informant の口から回復して見ると、どのような fa'alavelave が主催されたかを count する、などの復元方法がある。(iii) の仕方は、記憶の信頼性が問題なうえ、転出した系統、途絶えた paolo 関係が再現できず、実際より過小に復元される可能性がある。—— まてと別々に西欧人との接触によって戦いが抑止されると、交易活動が替わってきめ細やかな生活になるという例が New Guinea 高地で指摘されている(Strathern [1971: 54])、同様の傾向が Samoa にも妥当するとすれば、昨今の fa'alavelave のチーム自体が、対差の極端な方たちのひとつとして解明の対象とならなければならぬ。この傾向のことで、Strathern の仮説 とするであらう。

頭書の推算ができれば換算には、 $(1 \text{ aiga の平均 fa'alavelave 主催回数}) \times (\text{Samoa 全域の aiga 総数}) / 2$ と推算するもよし。

MV-PQ なる、'ie toga 数量方程式が、実証的なモデルとして有効なためには、各変数が各自独立 over して measurable であるか、と云う点の客観的な根拠から、(この方程式とは独立に)推定できなければならない。この場合、この方程式を仮説的なモデルとして採用し、説明的な用具の一部として用いることができ。例として [1] M, Q が一定であるのに、P が増大する (Y. Yamamoto の仮説 — 商品経済を経由して fa'alavelave に投入される現物財がふえるので、交換比がその各目数量と規範的にリンクし、'ie toga の交換比率も、並行して増大することになる) ため、V も増大せざるを得ない (= 仮らおは fa'alavelave の当季首 'aiga と paolo を増やせば、遠い縁故を頼って、広範囲から 'ie toga をかきあつめなければならぬという、'ie toga インフレーション状態が恒常化する) と説明する。あるいは [2] P, Q が一定であって、毎年一定量の 'ie toga が Hawaii, New Zealand

等 (あるいは 教会) 流出して置けるため、V が増大せざるを得ない、と説明する ('ie toga 退職数 — この仮説は、(i) 退職の事実を確認し、その数量を算定して、(ii) V の上昇と理論値 $M/(M+M')$ が十分説明するか試算する、というステップをふまねばならない)。さらに [3] M, P が一定であるとして、Q が増大する傾向にあるので (Strathern の仮説)、V が増大せざるを得ない、と説明するなど。

以上の 'ie toga 数量モデルは fa'alavelave が行なわれている Samoa 村落部の自給経済圏において妥当し、先の Prob. A, Prob. B には基本的に影響しない。

【 'ie toga 価値説の検証モデル 】

労働価値とは、特定商品に直接・間接に投入される、投下労働量(時間)のことであり、一定の条件を満たす生産システムに対しては、いつでも定義・計算できる、操作的な仮説変数 (operatively defined hypothetical variable) である。従って、これは、Samoa の伝統的な自給経済においても、算定可能である。

労働価値が有意義に算定できるための条件を念のため Morishima [1973] から再録しておく:

- (1) 各産業の生産技術は一定のものであり、ある産物を生産する際に技術選択の問題は生じない。
- (2) 総合生産 — 単一の生産工程から、複数の生産物が生じること — が存在しない。
- (3) 労働以外の本原的生産要素 — 土地、資本 — が存在しない。労働は、抽象的(間接)労働で測らる。
- (4) 全資本財は、同一の生産期間を有し、その期間は 1 (単位期間) である。
- (5) 全産物は、同一の生産期間を有し、その期間は 1 である。
- (6) 各生産過程は、1 時点投入 ~ 1 時点産出型 (point-input-point-output-type) である。

これは、多数の生産者が集まる自由競争市場に関して設定される命題であり、線型的な生産体系を念頭においている。(一般に生産関数は、規模に関して収穫逓減であると考えられるが、自由に参入する競争者多数がいる場合には、集約的な生産関数は線型とみなしうるようになる。) Samoa の伝統社会には、商品市場は成立していないが、その生産システムを投入産出関係へと抽象してみれば、同じく線型体系と考えることができる。そこで上記の各条件について、Samoa の民族誌的事実とつなげてみるならば:

- (1) — 各産物の生産工程は、伝統的な技術によって一義的に定まっており、条件はクリアされている。

(2) — 伝統的な生産方法に112E・結合生産が生じたり、ということはない。たとえば、いくつかの農産物を同じ畑に混植あるとか、ある仕事をしている最中“ついでに”別の仕事も片付けてしまうとか。しかし、これらの顕著な相乗効果をうまない場合には、これらの互々の生産工程に分離して考えることにはよいであろう。2. この条件をクリヤーさせる。

(3) — 'aiya は、土地を直接に利用する一系、資本を市場から調達するという条件も。即ち、Samoaの伝統社会には地代もまた金利も存在しないのであるから、この条件はクリヤーされる。(労働の標準化については後述する。)

(4) — この条件は、単純化のための便宜的な仮定である。その1つは、厳密な意味での資本財が存在しない、ということである。しかし、Samoaでは、資本——生産手段として生産過程のなかで滞留する中間生産物——を事実上は存在しない社会なのである。そのため、この条件は基本的にクリヤーされる。むしろ一連の資本財(たとえば、開墾した畑、漁獲用のカヌー、耕作用の掘り棒、植えたバナナやココツの木、...)といったものが存在するのであるが、資本財相互の投入産出関係が欠けており、資本蓄積や経済成長もみられない。静的(static)なSamoaの伝統経済の場合には、これらの資本財の価値を耐用年数で除して、毎年の最終生産物に割りあてるとするならば、これらの資本財を捨象して考えることができる。

資本財が存在する場合にも、各生産工程に中古の資本財を投入する総合生産の過程と考えることを前提とす。生産システムは、いわゆる von Neumann モデルとしてモデル化する他ないことにあるが、いまきたように、資本財を捨象してしまうと、(2)の条件に抵触することはないのである。

(5), (6) — これらをもと、市場での各財の取引を単純に説明するための便宜的な仮定にはならない。Samoaでは、タロイモの生育期間は約5ヶ月であるという。芋、バナナ、...その他各種産物の生育期間なども、バラつきがあったりするので、一旦これらに抵触するようにもみられよう。しかし、Samoaのように市場をもたない自給経済が、生産物を逐次に自己消費していく場合には、こうしたバラつきはとくに問題を生じない。そこで、これらの条件も、クリヤーされたと考える。

つぎに、各種生産物の、労働価値を、つぎの半順によって算出した場合にならぬ。

① (標準的な) 抽象的労働 (1 単位) を設定し、具体的なあいこの労働の支出をさうして標準に換算する手続きを特定する。

このステップは、労働価値論には昔々いみのテーマである。ポイントはそのような種類の活

動を「労働」とみなすのか、と、あるいは異なる質の労働をどのように標準化するのか、という二点に絞られる。第1の点に即して言うと、平常の生産活動とは区別された、fa'alavelaveの際の儀礼的な諸活動、あるいは matai 達の fonono などでの活動(述べた議論)をどう評定するかが、まお問題である。上野千鶴子は、生産労働に包括しうべき交換労働の復権を主張しておられるように、たしかにマルクス主義価値論は、いわゆる「生産」労働のみが価値を産むという偏見に、限るのみ汚染されている。しかし、生産/交換... の対比が有効であるのは、市場取引の範疇をむしろ前提とするためであり、Samoaの如き自給経済圏の物質代謝過程においては、タロイモの根の作業も、tula-fale の斧(知的労働?)も、当該社会の規範によつて公認された「社会的必要労働」にかさねられる。'aiya の影響下にあるすべての人々の活動は、'aiya の「労働」支出とみなすことにしよう。

Samoa 社会には、勤労の倫理が貫徹しているわけでもない。また、すぐには売り切ることができるような均一様な労働を人々が営んでいるわけでもない。性別、個人差、年齢差、... などにより、労働の内容はまちまちであり、また、休み・怠けりがある。遊び半分であたりある。これを標準化するには、これらの労働をいくつかに類別し、それぞれの対して換算率を定めるしかない。資本制下では、賃労働市場が成立し各生産工程は単純労働の投入によって運転できるのだから、これらの標準は、(しかし伝統社会では、各生産工程ごとの(平均的な)熟練作業をこつ、標準とみなす)である。

- (i) タロイモ耕作、調理、木工、... ; fonono の活動、... ; など、その作業の熟練者の1労働時間を、1単位とする。
- (ii) 非熟練労働や、子供の労働は、その生産性にあつた掛率により、換算する(たとえば、0.5)。
- (iii) 遊び半分の労働(たとえば、漁撈)、あるいは労働(たとえば、芋飼育)については、労働密度にあつた掛率を工夫する(たとえば、0.2)。
- (iv) fa'alavelave の出席の妨げない。いわゆる「生産的でない」活動は、特定の生産物を産むわけはないが、'aiya network を維持するための、必須の活動である。その1つは、(i) と同等なのである。こうした労働は、商品世界における家事労働と同じく、交換秩序の内幕に影響を及ぼすかたちで無償に動員されている。だからこれを無視したとしても、価値計算にはひびきはらない。
- (v) 単行行為は、接触以後みられなくなったが、その基本的な性格は (ii) と同じ。

(i) ~ (iii) の、労働量の判定は、のちの仮説 (ie toga 価値説) の検証結果と直接左右する重要なファクターである。この判定に関して、その留意性を check できるお存何らかの基準があることが、とりわけよい。Samoa の人々のあいだに、各作業の評定に関する基準が共有されている(たとえば、fonono の談話の際など)、最善。自給産品の、Apia 市場での価格が判明し、二次的参考に

返る。'ie toga を値りに回るとき仕方なく代価として手難オカヌー、アタ、... のレートが大体わかれば、これも参考となる。

② 自給経済中に登場する生産物の、完全リストをここに示す。

- 中間生産物 1. カヌー 2. 畑(タロイモ) 3. 罫(アタ) 4. ココナツ林 5. パナツ林
6. 椰子棒
- 最終生産物 11. タロイモ 12. アタ 13. 漁獲物 14. ココナツ 15. パナツ
16. (伝統的)衣料 17. 弓矢 18. 家屋 19. アタ、ムシロなど日用品
20. 'ie toga

中間生産物については、その平均耐用年数と、製造コストに関する情報が与えられているとされている。畑であれば、刈りこみから地味が劣るまでの年数。ココナツやパナツは、植える手間、植えるからの世話と、収穫の年数。

最終生産物も、中間生産物も、計量の標準単位を定めること。タロイモなら重量でいいが、1山とか、何人分の食糧とか、Native の単位があったりして、それも問題。アタは太いほどいい。屠殺時期によつて生産係数も変わってしまうから、どう標準化するか? Samoa の人々の評価を参考に、適当に標準化する。漁獲は重要な蛋白質源で、色々な種類が雑多なので、沿岸のものも含めると、労力投入形態により count down が難しいかもしれない。衣料や弓矢は現在生産されているものは、判らなくとも仕方ない。(生産に要する手間と、かつての女校生がわかる程度)。家屋は住居用、台所、支那集会所、... などいろいろある。Fairbairn [1973] によると住居用は15年、台所は4年の耐用年数という。無数にある日用品は、交換財、生産財として有用ではないものを無視して構わない。

③ 生産物 i の 1 単位に投入された総労働量を、算定する。

Leontief 派の投入産出モデルに従うと、生産物 i ($i=1, \dots, m$) の生産過程は、

$$(a_{1i}, a_{2i}, \dots, a_{ni}, l_i)$$

と記述される。すなわち、1 単位の生産物 i は、 a_{ji} 単位の生産財 j ($j=1, \dots, n$) と、 l_i 単位の労働力により生産されるのである。生産物 i の 1 単位に投入された総労働量 λ_i は、

$$\lambda_i = a_{1i}\lambda_1 + a_{2i}\lambda_2 + \dots + a_{ni}\lambda_n + l_i$$

のように書ける。あるいは、全生産財の価値ベクトルを Λ_I 、全非生産財の価値ベクトルを Λ_{II} 、生産財相互間の投入産出行列を A_I 、非生産財を生産するための生産財の投入産出行列を A_{II} とすると、生産財投入による価値決定は、つぎのように連立方程式体系として表現できる:

$$\Lambda_I = \Lambda_I A_I + L_I$$

$$\Lambda_{II} = \Lambda_I A_{II} + L_{II}$$

ただし、 L_I, L_{II} は、それぞれ生産財、非生産財を生産するために直接必要とされている労働量のベクトル。この方程式は、

$$\Lambda_I = L_I (I - A_I)^{-1}$$

$$\Lambda_{II} = L_I (I - A_I)^{-1} A_{II} + L_{II}$$

のように、一般には解ける。Samoa の場合には、 $A_I = 0$ と考定することができると、

$$\Lambda_I = L_I$$

$$\Lambda_{II} = L_I A_{II} + L_{II}$$

のように、至極自然に算定するはよい。(なお、単純商品生産社会のように、静学的均衡の暗黙的である社会では、投入産出のタイムラグは無視される (Morishima [1973-1974:51])。)

上述のように生産財でも商品経済では、その均衡価格は、各生産物の価値(の相対比)と一致する (Th.)。

生産物のうち、'ie toga については特に大きく、標準 'ie toga 1枚 (あるいは、その算出の基礎となる単位面積) を加工するに要する生産労働を、(継続した平均的な女性の場合を基準に) 測定する。もし観察の機会が乏しいならば、経験的 Informatively 同一の 'ie toga を受ける、あるいは、その期間で完成できるものをとると、平均をとるといってもよい。こうして、標準 'ie toga 1枚にたいして何枚の 'ie toga を生産する労働量を決定するおこなう。

④ fa'alavelave の main exchange における交換される財の、価値総量と比較する。

なるか? の fa'alavelave における、実際 main exchange の際に交換される財の、品目・数量にわたる詳細なデータと、別の、品目別数量ベクトル x, y の x と y による、 x の価値総量は $(\Lambda_I \Lambda_{II})x$ 、 $(\Lambda_I \Lambda_{II})y$ とする。3つの場合が考えられる:

- (i) $(\Lambda_I \Lambda_{II})x = (\Lambda_I \Lambda_{II})y$: 'ie toga が価値表現体として、機能している。
- (ii) $(\Lambda_I \Lambda_{II})x > (\Lambda_I \Lambda_{II})y$: 'ie toga が、その価値を上回る通用する力=200がある。
- (iii) $(\Lambda_I \Lambda_{II})x < (\Lambda_I \Lambda_{II})y$: 'ie toga が、その価値をFID-200通用しない力=200がある。

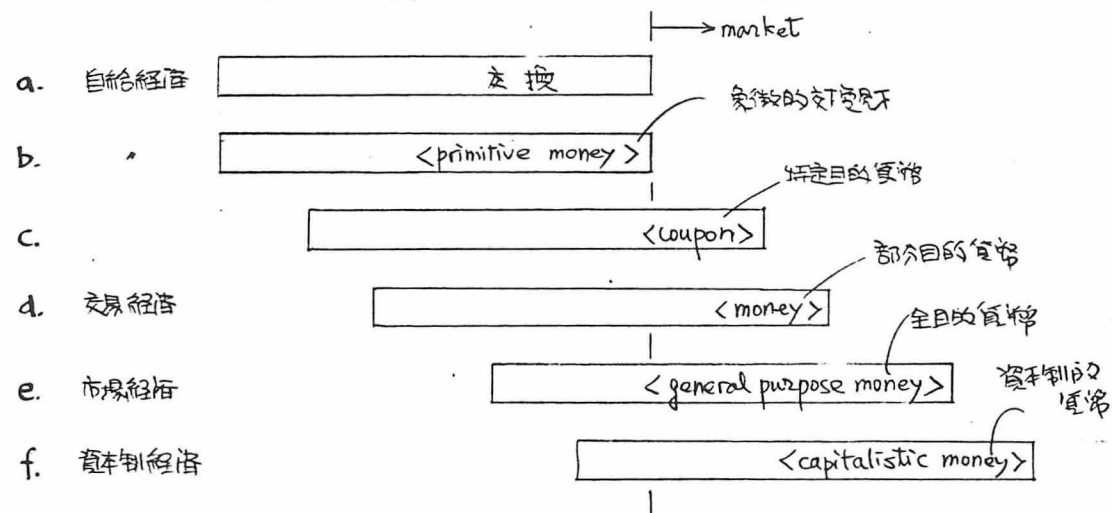
(i) については、'ie toga 価値総量が妥当であることが判る。の3作業は、Samoa の人々の価値を感受する仕組み (cognitive system) をつとめること。(ii), (iii) については、上記の力=200を数量モデルに200のほうで突進するものは、ある。

接触以前の伝統的 Samoa 社会において、二二までのバツような生きたものが採れたのである。作業は二二で終了する。しかし、その生きたものは、交換品目のために、自給経済に起因しない、

市場で買収して来た商品、Samoaの自給経済とは異なる生産システムに依りて作られた生産物を
含んである。このような場合に、果たして 'ie toga 価値説を検証する可能性がどのくらいあるか？
この疑問を解決することが、新たな実践的課題である。このためにまず、現状にある
貨幣・商品経済の浸透について、予備的な考察を試みておく。

【 Problems 】

Samoa社会をみまわっている文化変容、とりわけ貨幣経済の浸透が、語をやらしくしてある。どのよ
うな貨幣経済がどのように浸透しているか、また問題となる。そこで、典型的な自給経済から、資本制
経済に至るまでの階梯を示してみよう：



社会一般は交換力=ズGを内蔵しているが (a), Samoaのみにとて象徴的の形で表現している
社会もある (b)。これは象徴的がとて自身、特定の交換の社会関係を規定しつづけておける。Cou
ponとよんでおられるか？ (c. 贈答物システム、など) 交換力が特定の対象に限定され
ない、一般的に交換媒体としての性能を發揮するまでの物品が登場する。市場が成立しはじ
める (d)。この媒体、moneyが、財貨の相当部分を自由に入手する手段となる。自給経
済圏は容易に解体し (e)、資本制貨幣が、信用創造おととも射程に及ぶ貨幣である。よ
うに、資本制的貨幣である (f)。 (d. ~ f. の展開については、『前記の貨幣』のoutlineを
示した。)

Samoa社会は b の段階にあり、それが接触したシステムは、f である。Samoaの伝統的の村落
にも、また fa'alavelave の交換媒介の存在が、久しい以前から資本制的の貨幣 (紙幣) が顔を出
している。しかし、注意しなければならないのは、どうして事実と、"Samoaの村落経済圏が資本主
義化した" という命題を、ゴングチャリに及ぼさなければならぬ。市場的な貨幣をもちと知、

た伝統社会 (d ~) については、その貨幣も蓄積動機をもちた経済主体が、貨幣を資本制的
に行進しはじめるかもしれない。しかし Samoaの伝統社会には、その気配はまったくない。

- i) Samoa 村落の人々は、賃労働に従事し、現金収入を得るが、これは自給経済圏の外部、つ
まり、道路建設など政府の公営事業か、Apia の私企業、外国系の農場、学校・教会等
の就業、もしくは、New Zealand の出稼ぎに似ている。
- ii) 現金は、個人の所得であるものは 'aiga 単位' で運用され、蓄積して自給経済活動に投資した
り金利をためて運用したりする替りに、fa'alavelave の交換財や日用品 (洋服、カツメ、
タバコ、衣服、その他食品、...) 購入のために幾分か支出している。
- iii) したがって、伝統的な自給経済は基本的に手つかずであり、人々が相互に貨幣を貸借し
たり、くまなく運用したり、事業をおこしたり、ということがある。

このようなとき、貨幣とは、賃労働を通じて作られる、Apia 市場での商品引換券 (coupon) とな
る。この貨幣は、伝統社会内部に市場をもたせざるに、従来の貨幣というものはここでは現
物のひとつであるといえる。これは、Prob. A (Monetary Problem) に及ぶ。この問題に及
びます。

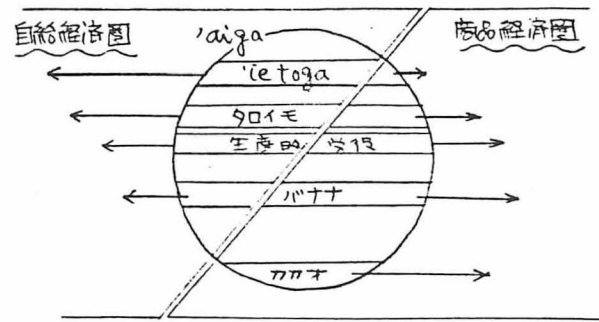
自給経済圏に対する貨幣の浸透の程度をはかるために、各経済主体の会計帳目を描きしめる必
要がある。この場合、(1) 何を経済主体と見做すのか、(2) どのような方式において会計帳目を
記載するのか、というところが問題となる。

(1) 経済主体について — household に匹敵する単一的な主体が見つかるかどうかは問題。land
tenure の主体、耕作の主体、漁撈の主体、貯蓄の主体、バッチ栽培の主体、fa'alavelave の当事者主
体、現金出納の主体、... などが無数に及ぶ。便宜上現金出納を管理する立場にある
単位を、経済主体と見做すのが、便利か？ したがって、pu'i 'aiga であると思える。

その他に、ie toga の取引に及ぶ経済主体、すなわち教会、文工、その他については、別
途に調査する必要がある。

(2) 通常の会計帳目は、集計単位が定まると同時に実行される。しかし、目下問題となる
この経済は、貨幣経済が部分的に浸透しているにすぎず、またその替り集計単位が明示的に
与えられているわけではない。しかし、無論、その活動の水準を '実物量' において記述すること
は可能である。さらに、別に伝統的な社会の経済活動が、価値 (= 労働時間) により、有意義に
集計可能であるという前提に及ぶ。任意の活動は、価値的にか、貨幣的にか、この一
かにおいて集計しうるものがあると考へておこう。 (たとえば) バッチの生産が実物一定量であ
れば、その内自給分として 'aiga 内で消費された分は、価値量を集計し、残りの、換金作物として

市場に出荷されるものについては、貨幣量(価格)で算定される。また、'aiyaに属する人々の提供する生産的労務のうち、自給圏に振りまかれるものについては、価値(労働時間)によって、貨幣価値(雇用される部分)によって算定(価格)で算定される。(11)の場合に。



調査の概要は、以下に示すような構成をとり得る:

I 資産査定: 調査時点において、当該'aiya (ある11の教会...) が保有している資産の総目録

| | (実物量) | (価値) | (価格) |
|--------------|---------------------------------|-------|-------|
| 1. 家 | 4棟 (建造後5年、3年、2年、1年) | 700h | - |
| 2. 畑 | 6ha (開墾後10年2ha、5年3ha、1年1ha) | 4500h | - |
| ... | | | |
| 8. トラック | 1台 (購入後3年) | - | \$400 |
| 9. 現金 | \$500 (cash \$100, 預金 \$400) | - | \$500 |
| 10. 'ie toga | 15枚 (標準枚算2.5枚~1, 1枚~12, 0.5枚~1) | 450h | - |

注) 資産のうち、市場を通じて獲得(その際には価格で、伝統的に生産して来たものについては価値で、その現在評価額(損耗分を減価償却して控除した結果)を記載する。

II 所得査定: 調査の特定する一定期間に、当該'aiya (ある11の教会...) に投入された、およびそこから産出された財貨やサービスの、総目録

| (生産目) | (実物量) | (価値) | (価格) |
|-------|--|-------|------|
| 家 | 1棟 | 250h | - |
| 畑 | 1ha | 1000h | - |
| ... | | | |
| 生産的労務 | 2000h (家製造250h, 畑開墾1000h, 家修繕600h, ... fonoの会合1000h) | 2000h | - |

<非生産目>

| | | | |
|----------|---------------------------------|------|--------|
| 家 | 3棟 (自給用0.5棟、現金作物用2.5棟) | 100h | \$800 |
| ... | | | |
| 賃労働 | 8000h (道路建設4000h, Apiaで勤務4000h) | - | \$4000 |
| 'ie toga | 2枚 | 300h | - |

カギ = 4002

- \$2000

<財貨の移転 - give side>

| | | |
|---|-------|--------|
| 家内 (give side - 11のApiaで購入) | 600h | \$100 |
| 現金 (New Zealandから送金\$1000, fa'alavelaveのgive \$800) | - | \$1800 |
| 預金 \$200 | - | \$200 |
| 'ie toga 4枚 | 1380h | - |

<財貨の移転 - take side>

| | | |
|-------------|-------|-------|
| 借金 \$100 | - | \$100 |
| 'ie toga 4枚 | 1230h | - |

注) 現金の、海外からの送金額、自給経済圏に滞留しているものの通貨量、預金残高、その他については、センサステータスの推定値と一致をあわせることができない。Fairbairn [1973] は、Taqqa (Savai'i 島)、Poutasi (Upolu 島) の調査に際して、各'aiyaごとの収支査定が記載されている(1961年)。この数値は、貨幣タームで記載されているけれども、同年の市場価格でこの数値を除くことができる。現金作物などについては、Banana Board, Copra Board等の官庁統計に依り、確実な集計量とすべきである。最近の雇用統計や、生産物量の売上統計などがある。こうしたデータの正確性を、何らかし check できるはずである。自給部門への生産的労務の投入は、もっとも推定がむずかしい項目である。おおよそ Fairbairn [1973] の推定値と一致。Samoa の人々の労働時間は平均、4.3~4.5h/日、25日~27.0h/週と推定される。その他、反動的労働単位の設定などについて、同書 p. 85f を参照せよ。ここで示した査定表は、通用のものとは相異しているが、リストが完全に実物量が正確に記載されているのは、通用の形式に直すのは容易である。所得査定を許す期間は、季節変動などをキャンセルして、任意であるが、1年が無難。

【 Fuller Models 】

貨幣経済の浸透は、1930年代の形が「あつた」か; Samoa の場合で「はい」; 現金収入が労働報酬のかたちで支払われるのか、それと現金作物栽培などから生じた剰余とを区別するのかが、

に於て、根本的に「何が買われるか」は別かと思われ。

ドット紙台の New Zealand 紙幣時代の紙幣は、Samoa 紙幣の「貨幣」を模倣したものが注目を浴びたというが、第二次大戦中の軍事施設建設の際には、高紙金で大量の現金労働者が採用された。この以来、相対的停滞期、バブルと現金作物の伸長期、相対的飽和による商品経済の一段の過渡期、このように。二つを念頭に置きながら、理想的ないくつかのモデルを構えておこう。

① 貨幣の市場モデル Apia のほか、西側に LT Samoa 内部の部分通商にのみならず、以下列した、モロロ村落部 (自給経済圏) と貨幣経済との関与について 2 焦点を (1) と (2) のように仮説化する。

(1) 貨幣は、労働 (生産的用途) に対する対価 としてのみ供給される。この貨幣は、自給経済圏内に滞留せず、たまたまに現る。市場で商品と引換えられる。貯蓄や貨幣蓄積は行なわれない。貨幣は商品引換券 (coupon) として機能する。

(2) 生産的用途は、労働に交換される市場での購買力 としてのみ認められる。この購買力は、自給経済圏内での同じ用途が發揮したかのような物財の支配力より、優勢である。このため、自給産品のいくつかは、駆逐され、伝統的なシステムの一部が変容する。

例) 漁獲物 (の一部) → 魚のカニツメ、樹皮布 → 機械織物。

その他、全く新しく導入される財もある: ウィ、ビール、トウモロコシ、ラジオ、...

(3) 自給経済は、二つの商品の生産に全く関与しない ため、二つの商品は、この固有の「価値」を付与する。この二つを、この商品に対しては、価格/労働の比率による。価値を代補するところからである。

(3) の原理は、自給経済には商品経済の解釈をどうも言いがちである。任意の商品の価格は一義的であり、労働も一義的である。これを入手するに要する投入労働量も一義的である。市場で購買した fa'alavelave に含まれる物品は、その価格の貨幣に換算する相対比 ($\lambda_i = p_i/w$) にて表わす。価値の「付与」は、この相対比に等しい。 ($p_i = \lambda_i w$)、である。自給産品を「価値 × 貨幣」 (すなわち「価格」) という発想に結びつけるように思われるが、このように行なわれる。このように、まず第一に、商品市場は自給経済と別の生産関係・供給関係を背景として行なわれるから、その存在意義的な価格をどうも思われる。第二に、自給経済の内部には、貨幣は一般的購買力 (単純貨幣) として行なわれる。各月の「価格」を考慮することはない。

以上の二つのモデルの間に、Samoa 社会が貨幣・商品経済を体験しはじめたと

せよ。そして、新しい「貨幣」を含む複合的な経済システムで、当初の Classical Model の基本的な特徴と顕著に現存させることになる。あるいは、市場で購買される商品や現金の「価値」を、 $\lambda_i = p_i/w$ として定義するにすれば、つぎの命題が成立するであろう:

(1) Classical Model における $\lambda x \geq \lambda y$ → 初期の貨幣モデルにおける $\lambda x \geq \lambda y$

ただし、後者の財バケツ x, y は、商品市場で購買されるいくつかの品目を含むものに λx をつづける。この「ie toga 価値説、ie toga 数量モデル」の考案は、(1) の追加的な前提を付した上でのことではあるが、「貨幣の市場モデル」に於いて成立するときである。

② 現金作物市場モデル Samoa に移植した plauter は、cocoa, copra, banana, 樹材、蓄牛、その他の製造業に手を加えられた。彼らの活動は、資本制大農政経営であり、Samoa の労働者と雇用しているわけであるが、1960 年ごろには、Samoa の GNP の半分を、二つを輸出する 1 次産品の生産が占めた。白人 plauter 以外に、地元の Samoa 人も、現金作物の栽培を営んでいる。彼らの出版動向の推察によると、copra は下落し、そのかわり 50 年代 banana が急成長し、半ば強制的に消費された。

現金作物市場モデルとは、単純化のための、次のように仮説からなる。

(1) 貨幣は、現金作物の市場での販売を通じてのみ供給される。この貨幣は、自給経済圏内に滞留せず、たまたまに現る。市場で商品と引換えられる。貯蓄や貨幣蓄積は行なわれない。貨幣は商品引換券として機能する。

(2) 生産的用途は、現金作物 (自給経済圏では有用性の全(ない、商品作物)に交換される ため、市場での購買力として認められる。この購買力は、自給経済圏内での同じ用途が發揮したかのような物財の支配力より、優勢である。このため、自給産品のいくつかは、駆逐される商品に駆逐され、伝統的なシステムの一部が変容する。その他、全く新しく導入される財もある。

(3) 現金作物の価値を付与する市場で買入される商品は、伝統的に生産に有利な価値を付与する。この二つを、この商品には、現金作物の価値 × 価格 / 現金作物の価格 による。価値を代補するところからである。

例) 'aiga の cacao は現金作物として栽培されるとする。100h の価値を有する cacao 1 人が市場で \$300 に売られ、その代金を「カニツメ (10T-2 (\$300))」を買った。カニツメ 1T-2 に代補する価値は、 $100h \times \frac{\$30}{\$300} = 10h$ である。

現金作物市場モデルでは、自給経済と商品経済との接合が、前述の「貨幣の市場モデル」と異なる点は、この「必要」して、文化変容の現状を、一義的に解釈することはない。

からなる。この困難にみまわれることは、まず第一に、現金をうる手段である換金作物が、E.F.の種類であることは明らかである。50年代以降の Samoa では、Cocoa, Copra, banana の3つが換金作物として重要であった。上記代替式は、その仲間として、この内での換金作物を採ることに伴って、最終的価値が相違しなくなる。一般に換金作物は複数であるが、このモデルでは、先の「労働市場モデル」とは異なり、現金を反映主義的に（あるいは価値論的に）解釈して、そのように思われる。

上でもわかるように、このモデルのモデルでも、事態を整合的に解釈する可能性が、このように、換金作物生産の動機づけは、主に、現金のためのものである。この作物は、投下労働の対価に相当する「賃金」が少額である。つまり、他の作物と較べると、投下労働-単位が市場で交換される「賃金」(前頁の例では、 $100h/\$300 = 1h/\3)は、各換金作物を通じて均等と仮定する傾向があり、その合理的な状態に於いては、各商品に於いて対価が「賃金」が一般的に決定されることになる。

このように、換金作物市場モデルでは、交換比 (terms of trade) が、その有利な換金作物に即して、定めらるが、これは「第2の困難」を生じ得る。Fairbairn [1973:32] によれば、Samoa の換金作物生産は、相当な剰余所得 (surplus) を生じ得るが、これは、推計に於いて、作物の売上代金から、投下労働 (に相当する労働) などの経費を差し引いたものである。労働相当部分が大幅に凌駕する割合に達する。このように、換金作物生産は、労働力を直接労働に変換する場合には、一層有利な賃金を獲得するに成功していることになる。この結果、換金作物市場モデルは、労働市場モデルに較べ、つねに、より多くの価値を代償することになる。つまり、換金作物市場モデルが、伝統的な交換比率を確保しようとする労働市場 (モデル①) と両立するに成功するに成功する。(——換金作物の価格は、多く熱帯産品であり、planter たちの課税を課税する水準に定まっている。彼らは、労働を支払う、資本費用 (金利、地代、その他) を負担し、十分な利潤を得ているのである。'aiga' の換金作物生産は、資本費用を一切負担してはならないから、planter と同様の生産関数に服しているから、(賃金と労働) 十分な利益を生じて当然である。)

換金作物生産が労働者に有利であるならば、賃労働は、換金作物生産の大転換が生じようとするのである。この労働者は、何れも「賃金獲得の動機づけ」が、ある程度は「容易」に実行できる。換金作物の生産は、'aiga' による統一と、土地の使用目的の変更、... さらには、経営的な努力が必要となる、(1) 'aiga' は、資本制の経営体制を有しているから、E.F.と有利な取引を、F.O.と換金作物生産にのみ関係するに成功する。(2) 多くの利用可能

土地の他の用途は、もう使っていない、余裕地帯、といった条件が、このように、この困難は、解決が容易である。この困難を克服可能な場合は、(あるいは) 生産的労働の対価に 'aiga' '土地' の貢献をみとめることである。労働以外に '土地' を本源的な生産要素に加えることは、当初の前提と矛盾するに等しい。

換金作物の重要なものは banana であるが、それは、自給産品として重要である。相当量が、主として消費される。この結果は、現金取引に、現金取引によるものがある。このために、もう一つのモデルをたてよう。

③ 自給産品市場モデル このモデルは、①、②と異なり、7/9 や 9/10 の自給産品は、Apia の市場で販売され、現金収入の源泉となる。仮定するところ。

(1) 賃金は、自給産品の市場での販売を通じてのみ、供給される。 この賃金は、自給産品圏内に滞留せず、現金に換えて、市場で商品に引換えられる。貯蓄や賃金蓄積は行われぬ。賃金は商品引換券として機能する。

(2) 生産的労働は、自給産品に変換される。市場での購買力として使われる。この購買力は、自給産品圏内で同じ用途が確保される。物財の支配力も、優勢である。このため、自給産品の市場では、競争する商品に駆逐され、伝統的要素の一部が変換される。その他、全く新たに導入される見込がある。

(3) 市場で購入される商品には、売却される自給産品の価値 × 価格 / 自給産品の価格 による。価値を分補するに成功する。

このモデルは、前項の、換金作物市場モデルと、類似している。販売する生産物が、自給産品圏内でも生産された自給産品である点に、異なっている。また、生産者と同時に、現金手段である自給産品が、F.O.以上あり、そのうちを採るに成功する価値量が、異なる。という問題。Apia の市場 (あるいは、格別な資本制世界市場) は、Samoa の伝統的自給産品圏とは、その自給産品 (またはその代替品) の生産関数も、その異なる供給構造に、より異なる。従って、一連の自給産品に於いて、その価値比率とは異なる価格比率を、示すことになる。このとき、代償する価値量 - 蒸気性 (この自給産品を中継するに成功する点から) 前項②の点と同様、一応 - 蒸気性を回復するに成功するに成功する。すなわち、自給産品の供給が、そのように動くかどうか、は、もう少し慎重に考へてみる必要がある。

自給産品 (4/10, 7/9, ...) の需要量は、F.O. Apia 在来の Samoa 労働者であり、7/9

た、村内自給経済圏の住人自身である。②には、細支店であるが一般的な需要が1130ニ
ニ②: 自給産品を、fa'alavelaveの際交換比率を用いるか(マカ、ie toga, ...)に、その以外の
日角目(タロコ、...)とに、別々に考えておく方がよい。前者(交換目)は、主に道-2マカfa'
alavelaveの準備に追加する村人が購入する必要がある。その対応度に応じて価格は高
高と存在する。⑤に依る村内自給部圏の圏内交換の融通が、Apiaマーケットに
て進め、不特定な関係に拡大したわけである。この割当は、Samoaの人々に非-2モ十分
充足であり、'異業種'交換目であるとして考えられる。価値量と代償関係の平準化は
はなされていないとされる。(ie togaを'養子'と見れば、相対的抵抗感がある。4山本
山本『1981: 100f』) 一方、後者(日角目)がApia市場での取引を促進するに依ることは、
事前の言明を必要とする。供給余力の大きいことは、貨幣取引への動機づけが強い。これは
は「出荷競争の結果に価格と存在する」といえる。その場合①の下限は、モデル①に依る資
産であると考えられる。換金動機による自給産品を市場に送り出す。貨幣よりも比較して、扱
下労働～現金収入の割合が不利であり、つまりである。つまり、自給産品市場モデル
では、価値と代償関係の中継に日角目がとられる傾向がある。代償は価値量
①の、労働-市場モデルと一致する傾向があるといわれるとされる。(タロコに
て日角目を、Apiaマーケットで買)-とすると、相対的抵抗感がある)

自給産品が、Apiaの市場に登場する際、交換目と供給目、日角目と需要目、伝
統的Samoa村人の各々が持つことに対する相対的抵抗感がある、その中で②の2
つの抵抗感、Samoaの2つの経済圏——自給経済圏/商品経済圏——の境に位置し
ており、その区別を異種秩序と区別するべきである。その抵抗感が存する。自給
自給経済圏は、その固有論理をもち、商品経済に呑み込まれる。その抵抗を一
種の批判として、Samoaの自給経済は、伝統的独自の交換システムと、自給秩序を
維持しようとする。

(6. Apia在住者が持つ自給産品市場がSamoa村内居住者にもたらす影響が大きい
がある、②は価格に「養子」として商品生産社会の支払いに、価値を正確に反映する
のと、211は「マカ」である。Apia在住者の需要と、2つの抵抗感が、価格と二理論化
らする(211)。

④ Full Model 実際Samoaの生産システムでは、以上分離した3つの貨幣経済化ステ
ップの全くと、その間に、海外移住者からの送金——つまり無償に受け取る額——
がある。これはモデル④=①×②×③+α である。つまり、前項をさらに部分的に解

説の可能性を、(特別の条件を極めることに依る)に依る。特に、New Zea-
land からの送金は、貨幣の価値が1130の生産的用途に付するが、解決不能で
ありに思われる。②の困難は、既にSamoa社会をみて、211の困難だと考えられる。

⑤⑥、①②に依る、迅速かつある貨幣経済の現状を伝達するの側から解決不可
可能性を探る際、前提は、伝統システムが、'価値'によって各-的秩序がたつたとして
ないか、という仮説的仮定である。つまり、Samoaの交換秩序が、ie togaを平
均的2加工品(elaborated goods)に非-2標準化するという事象が与えられた。逆解法と
て、ie togaの交換比率が、'価値を伴った交換目'であるとする。この仮説が
一般に非-2標準化するに依る。①、②の数量仮説は、重要な変数と汚
染の計である。

Samoaの伝統的交換秩序は、静態的に生産システムと自給背景とに依る。fa'alave-
laveに登場する日角目と依る、人々の取引活動の所産である。つまり、特定の2
(価値)によるものは付く)そのものは単純である。商品市場が形成される際、その
よるものは当初に依る、その性能、効用、... は明らかである。③は貨幣
は、その取引と依る性格を異にする。モデル④の段階においては、やはり'価値'は
つて進む、材料に「量」として貨幣が、伝統的システムに登場して「量」
として思われる。②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯、⑰、⑱、
⑲、⑳、㉑、㉒、㉓、㉔、㉕、㉖、㉗、㉘、㉙、㉚、㉛、㉜、㉝、㉞、㉟、
㊱、㊲、㊳、㊴、㊵、㊶、㊷、㊸、㊹、㊺、

モデル④(Full Model)に依る作業を、実行可能である。①、価値量の立場か
ら、既述のモデル①～③の「統合的」であるとの理解にたつ(各代償価値量を計算して
た)。④は、労働⑤の中継として、fa'alavelaveの交換比率と価値方程式は交換に
よる。⑥は数量仮説の立場から、Apia会計基礎を構築する。⑦はfa'alavelaveの
目、貨幣、ie togaのinput/outputを測定し、全Apiaに関する統計として、ie toga
の相対的交換比率を推計する。つまり、各日、貨幣のflow数量に依る、
時系列データを掘り出す。自給経済圏に相当する分を推計して、現時点の交換比率と
する。ie togaの「マカ」の相対的価値、たしかである。(マカ、デー)

モデル④、セクターデータのマカ、時系列分析(節)の手法に依る。これら
の機会が、ある程度は、たしかである。